

機関番号：14501  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2010  
 課題番号：19520632  
 研究課題名(和文)：リーウィウスとローマ共和政期における伝承および歴史記述の研究  
 研究課題名(英文)：Livius' Historiography and the Historical Tradition of the Roman Republic  
 研究代表者：毛利 晶 (MORI AKIRA)  
 神戸大学・大学院人文学研究科・教授  
 研究者番号：60174330

## 研究成果の概要(和文)：

本研究は、ローマで最初の歴史家ファビウス・ピクトルが属するファビウス氏の事績およびローマ共和政期の伝説群からコルネーリウス・コッススの決闘伝説(前5世紀後半)とエトルリア人都市ウェイイーを滅ぼし、更にガッリア人によって占拠されていたローマを解放したと伝えられるカミッルス(前4世紀初頭)の伝説を対象として、これらを史学史と文化史の視点から分析し、共和政末期とアウグストゥスの時代の政治文化との関係を論じたもので、これにより古代ローマの文化と社会の特徴の一端が明らかになった。

## 研究成果の概要(英文)：

This project analyzed the *res gestae* of the Roman *gens Fabii*, to which the first Roman historian, Fabius Pictor, belonged, as well as two legends from the cycle of legends of the Roman Republic. The first legend tells of the duel of Cornelius Cossus (in the second half of the fifth century B.C.) and the second legend is that of M. Furius Camillus who is said to have destroyed the Etruscan city Veii and then to have liberated Rome from the Gallic occupation (at the beginning of the fourth century B.C.). Essentially, this study from the viewpoints of the historiographical and the cultural history hence examines the relationship between the aforementioned legends and the political cultures of the late Roman Republic and of the Age of Augustus. As a result of the research, we now gain a better insight into some aspects of the cultural and the social characteristics of ancient Rome.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：西洋古代史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋古代史、西洋古典学、考古学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に着手する以前から、ローマで最初の歴史家であるファビウス・ピクトルと、

貴族の家で祖先の偉業が思い起こされ、語り継がれる際に大きな役割を演じたと考えられる祖先のマスク(イマーギネース・マヨー

ルム)に関して、若干の考察を行っていた。

(2) 本研究に先立って、前4世紀を中心とした中部イタリア(ラティウムとその周辺)の歴史を、以下の観点から研究していた。

- ①ローマによるこの地域の政治的統合と支配権正当化の試み
- ②この地域における国際政治と、西地中海世界の諸政治勢力との関係
- ③この地域へのギリシア文化伝播の様態

これらの研究を進める過程で、共和政期ローマにおける伝承と歴史記述に関する理解を深めることの重要性を強く認識するに至ったことが、本プロジェクトの背景にあった。

## 2. 研究の目的

本研究は、古代ローマ社会において過去の記憶がどのようにして継承されていたのか、ローマ人は自分たちの過去をどのようなものとしてイメージし、理解していたか、そして彼らはどのような意図のもとに歴史記述を行ったかを考察することにより、古代ローマの文化と社会の特質の一端を明らかにすることを目的としている。

古代ローマでは、散文による本格的な歴史記述の始まりは前2世紀の頭にまで遡るが、共和政期に綴られた歴史のほとんどは散逸してしまった。従って前4世紀のローマ史の研究は、アウグストゥスの時代の歴史家ティトゥス・リーウィウスが著した『ローマ建国以来の歴史』の第2ペンターデ(第6-10巻)を読むことから始めなければならない。リーウィウスは共和政期の歴史記述で伝えられていた伝承を新しい時代に生きる人間の視点で捉え直し、それを流麗な文体に移すことに本領を發揮したが、これらの伝承を比較検討して、その史実性を検証する作業はほとんど行わなかった。それ故、彼がローマの過去をどのようなものとして理解し、それをどのように描こうとしたかを明らかにすることが、彼の作品を歴史研究の史料として利用する上で非常に重要である。しかし史学史研究の目的は、リーウィウスの史料価値を明らかにすることに止まらない。歴史記述は、これに関わる人々の歴史意識を写し出す鏡であり、リーウィウスの歴史は、それ自体がアウグストゥスの時代の文化史・社会史研究のための貴重な史料と言える。この場合、語られる内容自体の信憑性はさして問題とならない。歴史家がそう信じた、或いはそう描こうとした事実こそが重要なのである。この視点に立つと、私たちは更に、ローマ人が本格的な歴史記述を始める以前の段階で、自分たちの過去をどのように捉え、それを伝承しようとしたかという問題にも突き当たる。つま

り、歴史意識と過去の記憶の伝承という営みを手掛かりとして、ローマ人の文化と社会の特質を考えるという課題である。そしてこの作業は、ローマで本格的な歴史記述が始まったとき、彼らは自分たちの過去についてどれほど正確な知識を持っていたかという史料学上の問題へと帰って行く。本研究は、これら一連の課題に幾ばくかの寄与を行うことを目的とした。

最後に、本研究の基本史料である『ローマ建国以来の歴史』の第2ペンターデを出来るだけ正確に、また読みやすい日本語で訳出することにより研究成果を一般に還元すること、これも本プロジェクトの重要な目的の一つだった。

## 3. 研究の方法

(1) リーウィウスの『ローマ建国以来の歴史』で語られる幾つかのエピソードや主要人物の事績に手掛かりを求めて、ローマの過去に対してリーウィウスが持っていたイメージと、彼は過去をどのように理解していたか、またどのように描こうとしたかを明らかにする。このための基礎作業として、以下のことを行った。

- ①共和政末期とアウグストゥスの時代の政治文化の解明
- ②リーウィウスの歴史書、特にその第2ペンターデと、主にギリシア語で書かれた平行史料との比較(過去の研究で既にある程度行っているため、今回は過去の成果の補強に止めた)

(2) 本格的な歴史記述が始まる以前のローマ人社会で、過去の記憶がどのように伝達されたかを、以下の2点に手掛かりを求めて考察した。これらについては、史料上の制約から断片的な考察以上のものは期待すべくもないが、断片的な考察結果を集めることで共和政期のローマ社会における記憶の伝承に関する理解を深めることを目指した。

- ①過去の記憶が語られ、集団的に伝承された場としての貴族の葬儀
- ②文字による記録、特に「コーンシル表」と「神祇官の年代記」

(3) 史学史の研究であっても歴史研究である以上、伝承と史実の関係を無視することはできない。そこで文献史料の信憑性をコントロールするため、また歴史家としてのリーウィウスを理解し、本格的な歴史記述が始まる以前に過去の記憶がローマ人社会でどのように伝えられていたかを考察するためにも、考古学の研究成果を援用すべく努めた。

## 4. 研究成果

(1) 共和政初期の伝説群から、コルネーリウス・コッスの決闘伝説（前5世紀後半）とカミッルス伝説（前4世紀初頭）をサンプルとして取りあげ、伝説の形成・改変を共和政末期とアウグストゥスの時代の政治文化との関係で考察した。

①アウルス・コルネーリウス・コッスはウェイの王ラルス・トルムニウスを決闘で殺し、その武具をローマでユピテル・フェレトリウス神にスポリア・オピーマとして奉納したと伝えられるが、リーウィウスは彼がこの時に就いていた職について、スポリア・オピーマ奉納の条件の観点から論じている（第4巻19章5-11）。20世紀初めにドイツのローマ史家 H. Dessau がこの伝説を前28/29年にマケドニアの総督だったマルクス・リキニウス・クラッスがバスタルナエ族の王デルドーを殺したと結び付け、オクタヴィアヌス（アウグストゥス）の政治的意図との関連で論じて以来、この伝説はアウグストゥスのイデオロギー政策とリーウィウスの支配者に対する態度との関係で様々に論じられてきた。近年では J. W. Rich が、クラッスは政治的な判断からスポリア・オピーマ奉納の申請を断念したと考えられるのでこの問題が政治の表舞台で論じられることはなく、リーウィウスの議論に政治的な意図に基づくアウグストゥスの介入を読み取るべきではないと論じている（1996年）。本研究では、こうした論争を踏まえた上で、アウグストゥスの政治的な意図に基づく介入は否定しがたいが、伝承を伝えられるがままに語ることで、支配者の主張を受け入れる現実的な態度は、リーウィウスの中では共存するものであったという、かつて試みた解釈が基本的に正しいことを確認しえた。これについては、かつての議論を補強する論考を発表する予定である。

②リーウィウスが伝える前4世紀初頭の歴史はマルクス・フーリウス・カミッルスという人物を中心に展開するが、これはローマ共和政期の歴史記述のなかで、伝承がこの人物を中心に再構成された結果だと考えられる。そうした中で特に注目されるのは、ウェイ陥落を祝って行われた凱旋式において白馬を用いたために告発され、一時亡命を余儀なくされたという伝承である。この伝承は、タブソスの戦いのあとカエサルに凱旋式で白馬を使用することを認めた元老院決議（Dio Cass. XLIII, 14, 31）との関係が研究史上問題になっている。つまり、もしこの伝承がタブソスの戦い（前46年）のあとに作られたとすれば、反カエサル派がカエサルを非難するために作ったと解釈しうるし、逆にカエサル派が先例を求めるため作ったという解釈も可能である。本研究では、この問題を論じた研究を整理し、そこで試みられている

議論をカミッルスの凱旋式と裁判を物語る史料にあたって検証したが、今のところまだ最終的な結論を出すまでに至っていない。実はこの問題は、単に前46年のカエサルの凱旋式との関係だけでなく、凱旋式の就航的な意味、特に凱旋将軍が果たした役割（彼が演じるのは王かユピテル神か）についての理解とも大きく関わる。凱旋式に関してはここ数年で様々な角度から論じた研究所が相次いで出されており、今後これらの研究を検証した上で、より広いコンテキストのなかにカミッルス伝説を位置づけ、考察する予定である。

(2) ローマで最初の歴史家ファビウス・ピクトルは、共和政期の歴史を綴るにあたり、ファビウス氏に伝わる伝承を利用したことが研究史のなかで指摘されている。そこでリーウィウスの第1デカーデ（第1-10巻）で伝えられているファビウス一族の事績を比較検討し、そこに何らかの特徴が認められるか調べた。その結果、前4世紀半以降、質量ともに伝承に変化を想定しうることを確認した。リーウィウスが語るサムニウム戦争時代のファビウス氏の活躍には類型化された話が多いのは確かだが、少なくとも、この頃からファビウス氏は一族の祖先が成し遂げた事績の記憶を伝承することに強い関心を持つようになったのは確かだろう。これは、ガイウス・リキニウス・ストローとルーキウス・セクスティウス・ラテラーヌスの名と結びついて伝わる改革の結果、ローマの貴族層で再編が進み、選挙戦で勝利を収めて高位の官職に就くことで国家の運営を担う新しい貴族層が形成されたことと無関係ではない、との見通しを立てた、今後は、リーウィウスの第2ペンターデの分析を通して、この見通しを更に肉付けする作業を続ける。

(3) ローマ人は、共和政が始まって以降毎年公職に就いて国家を統治した人のリストを、暦を指すのと同じ言葉を用いて、ファスティと呼んだ。このファスティは編年体で書かれた歴史の骨格となっている。恐らく前4世紀の末以降、ファスティは何度か編成しなおされたが、共和政末期から帝政初期にかけて碑文に彫られたものの断片が残っている。最も重要なのはアウグストゥスが編纂を命じて彼の会専門の壁に刻ませた表（いわゆるファスティ・カピトリーニ）である。様々なルートで残るファスティは、前300年以降の部分については今日完全な形で再構成されているが、それ以前の部分は欠損と混乱があり、改竄の跡さえ残る。しかしトータルとして見れば、かなりの信憑性を認める研究者が多いと言えよう。本研究では、碑文で残るファスティに注目して断片を実見調査した。

ほとんどが先行研究における議論の検証と確認に終始したが、実見で得られた観察結果を非文集 (*Inscriptiones Italiae*, vol. XIII) と照合しえたことは有益だった。

(4) 『ローマ建国以来の歴史』の第2ペンターデの訳は、前半部分(第8巻24章まで)を2008年6月にリウィウス著『ローマ建国以来の歴史3—イタリア半島の征服(1)』(京都大学学術出版会)として出版した。後半部分は同「西洋古典学叢書」2013年度刊行分で出版するため、2012年9月の完成を目途に現在第10巻を訳出中である。リウィウスの第2ペンターデは前4世紀のローマ史に関する唯一の現存する通史として重要であるにもかかわらず、我が国では翻訳がなかった。それ故今回の試みは、西洋古代史研究者はもとより西洋古代史に興味を持つ一般読者にとっても、大きな意義を持つと思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①毛利 晶、古代ローマの市民権とケーンズ (戸口調査) —所謂*ius migrandi*に考察の手掛かりを求めて、西洋史研究、査読有、新輯第39号、2010、pp. 1-32

②毛利 晶、*Tabulae Caeritum*考、紀要(神戸大学文学部)、査読無、37号、2010、pp. 35-59

③毛利 晶、ローマによるカエレ併合と *civitas sine suffragio* (投票権なき市民権)の起源、史学雑誌、査読有、第118編第4号、2009、pp. 39-63

[学会発表] (計1件)

①毛利 晶、*Tabulae Caeritum*考—ケーンソルの譴責と古代ローマの市民権—、古代史研究会、2008年12月7日、京都大学

[図書] (計1件)

①毛利 晶訳・リウィウス著『ローマ建国以来の歴史3—イタリア半島の征服(1)』、京都大学学術出版会、2008、288頁

[その他]

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

毛利 晶 (MORI AKIRA)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：60174330

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者